

20年も前になります。NHKラジオ深夜便・朝4時の「心の時代」を録音しながら聞く習慣を持っていました。その時の話し手は渡辺和子さんで、今もって新鮮に思い出されます。渡辺和子さんを通しての職業奉仕観を考えてみましょう。

昭和初期に2・26事件が起こり、日本は軍閥政治に傾斜していきました。

この事件では時の教育総監・渡辺錠太郎中将は暗殺されるのですが、反乱軍が侵入してきた時、小学3年生だった次女の渡辺和子さんは、父から机の下に押し込まれ、目の前で43発の軽機関銃を打ち込まれて惨殺されるのを目撃します。射撃の名手だった渡辺中将はピストルで一人の兵隊の足だけを撃って、自分は惨殺をされ、それから包帯にぐるぐる巻きにされた父の遺体を葬儀されたというのです。

渡辺和子さんは岡山の聖心ノートルダム女子大学の学長をされていた方です。

29歳まで外資系の会社でエリート社員として勤められていましたが、修道女としてアメリカに修業に行かれました。

8月の暑い日に、130人からの夕食準備のために、ナイフとフォークを一人ひとりのテーブルに汗しながら並べる作業をしていました。

渡辺和子さんは次のように語りました。

～そこへ年上のシスターが来て「シスター、貴女は今何を考えて仕事をしていますか？」と聞きました。私は「Nothing、別に何も考えていません」と言いました。すると先輩は厳しい顔をして「You are wasting time, 貴女は時間を無駄にしています」と言われました。先生は自分の耳を疑って、自分は一生懸命仕事をしているのに、何故だろう？意味が判らなくなっ て聞き返しました「どうしてですか？」すると、その先輩は笑顔でこう言われました。

「同じ皿を並べるのなら、やがてそこに座る人のために心の中で、幸せになりますようにと祈りながら並べるのです。何も考えずにただ漫然と並べる事が、それは時間を無駄にしているのですよ」「そうすることが仕事に愛を込めることになるのですよ」と。

それまでの私はキャリアとして仕事は手際よくすることが仕事のやり方だと信じてしてきました。一つひとつの仕事に愛を込める。時間に愛を込めると言うことは、初めて教わりました。そして私の救いになりました。以来庭の草を取るときも、根っこから草を取り、少年の非行が根っこから無くなりますように、恵まれない人に愛が来ますように、と祈って仕事をするようになりました。

好きな人の為には幸せになりますようにと祈りを込めてするのは、誰でもします。130人の修練女の中には好きな人も居れば嫌いな人もいました。一人ひとりにお幸せに、お幸せにと祈ってお皿を並べる、フォークを置く、人に左右されての仕事ではなく、自分が自分の時間をどう使うかだったと思います。

人生を刻む時間を、有難いと思って刻むのか？幸せを願いつつ刻むのか？憎らしいという気持ちで刻むのか？全て自分にかかっているのです。

それによって、そこに座る人が果たして幸せになったか、どうかは判りませんが、確かなことは、自分自身が幸せになったということです。

お皿を置いたり、草を取ったり、そのこと自体の行動は全く同じでも、心の中で祈っているかどうか大事なのです。私にとって雑用と言うものは無くなりました。雑用と言うものは、人が仕事を雑にした時に雑用という用になるのであって、どんなつまらない仕事であっても、その仕事に愛を込めるならばそれは雑用ではありません。

トイレの掃除でも、自分の心の汚れが落ちますように、世の中の汚れがきれいになりますように、と願うならば、仕事に意味が出来るのです。雑な人生を作るのか？不平不満の人生を描くのか？愛のこもった人生にするのか、それは自分が決めるのです。

～～。

～～寝ながら聞いていた、深夜便でしたがベッドに起き上がり正座して、聞いたものでした。～～

職業奉仕観は人それぞれで、100人100様それがロータリーと言えます。

私の尊敬するPG故佐藤千寿先生は多くの著書ある中で「ロータリーの原点は職業奉仕である。職業奉仕とは、職業を通して人を喜ばせることであり、社会に幸福をもたらすことである。」と簡潔な定義をされています。